

梶山女学園大 ○内藤 章江 橋本 令子 加藤 雪枝

<目的> 昨年当学会で色の組み合わせによるビジネススーツの着装イメージについて報告した。今回はネクタイの柄と配色が着装イメージに及ぼす影響を明らかにし、さらに視覚判定時の眼球運動がイメージ形成に及ぼす影響を調査し検討を行った。

<方法> 前回用いた試料の各スーツカラーより評価性の高いものを選定し、ネクタイ部分に3種類の柄と同系、対照配色を施した。さらにホワイトシャツを加えて計72試料を印刷し使用した。被験者は若年及び熟年男性被験者各30名と女性被験者30名の計90名を対象とし、14形容詞対を用いてSD法による5段階尺度評定を行った。調査データは多変量解析を適用し、その特徴について検討した。その結果から特徴のある試料を選定し、アイマークレコーダにて視線の注視点及び停留点軌跡を測定し、眼球運動とイメージについて検討を行った。

<結果> イメージ構造は評価性と目立ちの2因子が抽出された。着装イメージに対してネクタイ柄が及ぼす影響は少なく、むしろ配色の影響が大きくなる結果となった。同系配色を施した場合には評価性が高まり、目立ちは低くなる傾向が見られた。対照配色を施した場合には評価性は低くなり、目立ちは高くなる傾向がみられた。視覚判定時の眼球運動では若年男性被験者はモデル全体を平均的に注視した場合には評価性に影響を与え、Vゾーンを注視した場合に目立ちに影響を与えることがわかった。また熟年男性被験者、女性被験者は主にVゾーンを注視してイメージ形成を行っているが中でも女性被験者は視線を小刻みに移動させ注視した部分を総合してイメージ形成を行うと考えられる。